

新井白石と津輕史

宮崎道生

序―新井白石と東北地方

新井白石の著書に『奥羽五十四郡考』のあることはよく知られたところであり、その他の著作や書簡において東北地方にふれた記述が多々あることも、改めて言ふまでもないが、白石が東北地方に浅からぬ関心を抱いたことには幾つかの契機があるやうである。

その第一は義兄の郡司正信が相馬家に仕へたこと、第二は白石が堀田家に仕へた関係から正俊歿後、嫡子正伸に従ひ領地山形に赴いた経験をもつこと（これが機縁となつて『山形紀行』が生れ、この著作が白石と木下順庵とを結びつける媒介的役割を果たした）、第三には致仕後の晩年に仙台藩医佐久間洞巖と文通により深く交はつたこと（『新佐手簡』、第四には源義経に好意を抱いてゐたことから義経に関係ある東北の諸地域に目をむけたこと、第五には自らを新田氏の子孫と考へたことにより南朝に深い関心をもち、ひいては東北地方における南朝勢の活動に注目するに至つたこと、第六に坂上田村麻呂・靈の碑への関心がそれらに関連のある地域に着目させたことなどが挙げられよう。しかも、甲府藩主綱豊、後の六代將軍家宣への歴史進講が、上記のやうな関心・感情の域を越えて東北史の研究へとたかまり進んで行つたものと思はれるのである。

本稿では、主として最後の契機と世界認識の拡大とによって得られた史学上の成果のうち、主として津輕地域についてのそれを取り上げることにし（一部北海道にも及ぶ）、紙幅の都合上、時期を古代に限定してエミシ関係の「津刈」「後方羊蹄」「都加留（蝦夷）」論、及び坂上田村麻呂の征夷とその遺跡伝承観とを課題とすることにより、白石の津輕古代史考察の輪廓を描いて大方の御批判を仰ぐこととする。

一 白石の津刈・後方羊蹄・都加留（蝦夷）論

「津刈」「後方羊蹄」「都加留」等の文字の見えるのは『蝦夷志』の序文であるが、第一の「津刈」―或は「津輕」「都加留」と表記―は地域をさすものであり、第二の「後方羊蹄」は齊明御宇に政庁の置かれた地点とされ、第三の「都加留」蝦夷は蝦夷の人種区分（三種）の一つ、最も遠隔地に住むものと記述されてゐる。即ち、序文の冒頭において「蝦夷、一に毛人と曰ふ、古の北倭也」（原漢文、以下同様書下し）といひ（白石全集本は誤字が多いから、今は白石自筆本に拠る―新井家所蔵）、「北倭」の文字が『山海經』に見えること、漢の光和中に鮮卑の檀石槐による倭人の国への侵寇と倭人千余家の虐略に

について述べたのにつづいて、「鮮卑は東胡の種」であるが、その鮮卑が虜略した倭人を移し置いたのは即ち「今の靺鞨東北の地」でその謂はゆる倭人とは即ち「北倭也」と述べた後、蝦夷居住の範囲を示して次のごとく説明する（括弧内は割註）。

「夷、種落多し、渡島蝦夷と曰ふは其の東北海中に在る者、北蝦夷と曰ふは其の徙りて内地に居る者なり。北を越国と謂ひ東を陸奥国と謂ふ。鰺田（一に鰺田に作る、今秋田に作る）と曰ひ、淳代と曰ひ、柵養（一に城養に作る）と曰ひ、津刈（一に津輕に作る、又都加留に作る）と曰ふは、皆東北の別也」

右につづいて「宋書」「唐書」「景行天皇征東詔」の一節をそれぞれ引用した後、「是に由りて之を觀れば、其の内地を侵し犯すこと、蓋し由來既に久し。而して叛服も亦た屢しばなり」といひ、有名な斉明紀四年・五年に見える阿倍比羅夫の蝦夷征討の記事を掲げ、第二の「後方羊蹄」に言及する。これは周知の通り五年の記事に見えるもの、「五年復た阿倍臣を遣はし鰺田・淳代・津輕・胆振鉏等の首帥を率ゐ、以て蝦夷を伐たしむ。乃ち其の地を徇へ、遂に治を後方羊蹄に置きて還る（後方羊蹄、讀みて之^{シリベシ}と云ふ、即ち今南部之利辺之の地也）」と述べたのが、それである。

更に右につづく文において、第三の「都加留」蝦夷を説明する。これまた著名な『日本書紀』所収の「伊吉連博德書」の一節、唐の高宗の蝦夷についての質問に答へた我が国使節の答弁「類、三種有り。遠きは都加留、次は麤蝦夷、近きは熟蝦夷、今此れは熟蝦夷なり。謂はゆる三種とは其の荒服及び内地に在る者を挙げて言ふ也」を引き、そ

れに割註を加えて次のごとく述べてゐる。

「（前略）都加留は即ち津輕、是れ其の内地に在りて遠き者也、麤は猶ほ荒と言ふがごとき也、是れ其の荒服に在り既に遠きに次ぐ者なり。熟は其の内地に居りて近き者を謂ふ也。」

そして「厥の後、凡そ蝦夷と稱する者は、皆其の内地に在る者を謂ふなるのみ」と補述してゐる。

以上の記述によれば、白石によつて津刈・津輕・津加留で表現された「ツガル」の地は、内地に属するもので今日我々の通念となつてゐる固有地名としての津輕地域をさすと考へられるのであるが、第二の「後方羊蹄」の方は、白石がこれを北海道南部の地点と見なしてゐることが注意を引く。即ち『蝦夷志』本文第一の「蝦夷」の項において、松前周辺に居住する「夷人」の聚落を説明してゐるが、その中の西にあるもの四十一を挙げた中に「シリベチ」があり、それに註記を加へて「国史、後方羊蹄に作る、即ち古時治を置くの所なり」と記してゐるのがそれである。

※白石のこの考案を批判した人物に、考証学者として知られる猪飼敬所がある。即ち中村某宛の書簡において「蝦夷志」にふれ、「後方羊蹄ハ何レノ地ナルヤ今知ルヘカラス。コレヲ今ノ蝦夷西部ノシリベシト云フハ白石力誤ナルベシ」といったのが、それである。

（猪飼敬所先生書東集卷五）——『日本儒林叢書』第三冊）。拙著『新井白石序論増訂版』二二六頁、参照。

松前に因んでここに附け加へて置くべきは「渡島津輕津」のことである。この文字は『蝦夷志』序につづく図説に見えるもの、

「津軽の地小泊よ（自）り舟を発し北行すること八里にして松前に到る。亦た御厩津よ（由）り西北行十四里にして松前に到る（四時、此の路常に通ず）、松前は夷地の南界也（国史に謂はゆる渡島・津軽・津は、蓋し此れ）」

とある。その「国史所謂」とは、『続日本紀』養老四年正月丙子（廿三日）の条に当り、「渡嶋・津・輕・津・司・從七位上諸君・鞍男等の六人を誅・鞆・國に遣して其の風俗を觀せしむ」のうちの「渡嶋・津・輕・津」がそれで、この場合の「津」は港の意味に使つてゐるやうだから（上文中の「御厩津」のごとき）、津・輕・津（白石は「津・輕の津」と訓んでゐる―後出）とは津・輕の港と解すべきであり、従つて白石の觀念では津・輕・津・即ち・松・前の・港であること疑いない。もっとも白石のこの考へ方には異論もある。その異論の中、渡島を北海道にとること自体に反對するのは田名網宏氏であり、北海道説には賛成しながら津・輕・津を津・輕の港と解することに反對したのは滝川政次郎博士である。田名網氏が白石説―白石が渡島を北海道と解したことを示すのは上記「渡嶋・津・輕・津」のほか、前記の通り「渡島蝦夷」といふは、其の東北海中に在る者―といふ説明によつて明かである―に反對されるのは（田名網氏は渡島即ち淳代・津・輕・地方説）、「平安中期ごろ奥羽の開拓も進むと、津・輕・海峡を隔てた北海道が北方の異族の地としてしだいに關心がたかまり、交渉も行われるようになった」との觀方に基づくのであり、その平安中期以降になると、「津・輕・地方も事実上渡島ではなくなつたと同時に、渡島の名に最もふさわしいものになつたのは北海道であつた」と言はれる（「古代蝦夷とアイヌ」―古代史談話會編『蝦夷』所収）。この田名

網説に反對し（「津田（左右吉）博士の説を妄信」した結果とする、津田説については後述）、白石の北海道説に賛成される滝川博士が、津・輕・津・即ち・松・前の・港的・解釈に反對された理由は、「津・輕は地方名であつて港名として古史に現はれたことは一度もない」といふにある。

博士によれば、『続紀』にはゆる「渡嶋・津・輕・津・司」とは、「津・輕・海峡を横断して北海道・津・輕・半島間を往復する船の発着港を監察する官司」のことである。かういふ思考の背景について滝川博士は、斉明朝以前と以後とは日本人の氣象が大いに異なつてゐることを示される。即ち天智二年の白村江の敗戦は日本人を臆病にさせ、従前のやうな進取の氣象を失つてしまつたが、「斉明朝の日本人は、敗戦を経験しない向う見ずの日本人である。彼等は蝦夷地はおろか肅慎國までも躍り込んでゆく勇健な人々であつた」と言はれる（「斉明朝における東北経略補考」―史学雜誌六七の二）。

滝川博士の右の解釈は確かにすぐれた着想に出てゐると思ふが、これとは別の考へ方も出来るやうに思はれるので少しく私見を述べたい。それに先立つて少しく辨析しておくべきは、田名網氏の渡島説が必ずしも津田説の忠実な継承とは認められないことと、その白石説批判には誤解があることである。といふのは、津田博士の説明では、渡島は田名網氏の要約された「淳代・津・輕・附近」といふ表現はとられてゐず、「齋田、淳代、津・輕のやうな、本来の固有名詞ではなく、これら諸部落の総称」であり、或ひはまた「津・輕を含んだ広い地方の称呼でもある」し、さらには「服属した蝦夷の総称」とまで拡大されてゐるからである。津田博士は「渡島・津・輕・津・司」を白石と同様（「本朝軍器考」、

後掲)「渡島の津輕の津の司」と訓まれ、この解釈に基いて上記のやうに「津輕を含んだ広い地方の称呼」とされるが、その「渡島諸部落の監督官」の駐在地についての説明は極めて漠然としてゐる。即ち「津輕津司が渡島諸部落の全体を統轄したのか、又はかういふ津司が津輕のみでなく淳代にも鱒田にも置かれ、それ／＼の津にゐてそれ／＼の部落を監督してゐたのか、不明である」とされ、「もし前者であつたとすれば、其の駐在地即ち津輕の津は鱒田であつたかも知れぬ。

(中略)鱒田は内地との交通の要津)たゞかう見る場合には津輕の名は鱒田淳代をも含めた意義に用ゐられたとしなければならぬ」云々と言はれる(「肅慎考」——『日本古典の研究下』所収)。序でに一言附加すると、津田博士の考察では、津輕蝦夷及び渡島と關係の深い肅慎は「鱒田・淳代・津輕、などと甚しく隔つてゐない土地」である。また前述の「後方羊蹄」は、アイヌ語の Shiri-pet 即ち大河の義で、岩木河から来た名称ではあるまいか」とされてゐる(同上)。

他方、田名網氏の白石説批判における誤解とは、「蝦夷志」の所説を「渡島を北海道として、津輕を松前であらうとする説」と理解され、また「渡島津司と(を?)津輕津司の意とする説」(筆者註——同じく「蝦夷志」をさすか)とも解釈されたと思はれる点である。前者が明かに誤解であることは、白石が「津輕の地小泊」といふ言ひ方をしてゐることからも類推できることであり、津輕・津を松前の港であらうとはしてゐるが、津輕(広義)即ち松前とはしてゐないからである。次に「渡嶋津司」を「津輕津司」の意味とする説——といふ表現も不可解なのは、「統紀」には「渡嶋津輕津司」とあつて田名網氏のやうに津

司を二つに分けて別物としては取扱つてゐないからである。津田博士が「渡島の津輕の津の司」とよまれたやうに、右の語は渡島の中の津輕津(港)の司(官司)と解するのが最も自然であり——私見では白石もかういふ認識に立脚してゐたものと思ふ——、田名網氏の説のやうに二つの津司の存在を想定するのは無理なのであるまいか。かう考へると、滝川博士の渡島・津輕間、即ち北海道・津輕半島間の住復船発着港監察官司といふ名案も、現代的解釈に傾いてゐるやうに感ぜられなくもない。

そこで上記の最も自然と思はれる考へ方に立つて「渡嶋津輕津司」を捉へ直すと、顧みられてよいものに「ツガル」の語源説がある。これについては拙著『青森県の歴史』ですでに述べた通り、「新撰陸奥国誌」や「大日本地名辞書」の説などがある。前者はそれを「津借」の意味と解し(むかし蝦夷が松前島から渡来してこの国、津輕の津を借りて住んだ)、後者はこれを以てアイヌ語と解し「今の夷語ト・カリは海豹なり」とされてゐる。どちらも特色があるが、前者の思惟方法は逆用する時には、津輕の勢力が松前地方に及んだ結果、同地に「津輕」の名をもつ港ないし地点が生れたと考へることもできよう。例へば現に坂本太郎博士など、渡島を一応は秋田・能代・津輕等の地の総称である、とされながらも、「時と共にその地は北進した」といふ見解をとつてをられるからである(日本書紀と蝦夷——前掲「蝦夷」所収)。

以上、「津加留」蝦夷の問題から渡島の地域に及び白石が「後方羊蹄」を北海道南部の所在と観、渡島をも北海道に擬したことを中心にして、諸家の説を顧み検討し來つたのであるが、周知の通り斉明紀五

年の記事には「陸奥蝦夷」と並んで「渡島蝦夷」の名が見え、さらに既にふれた「肅慎」のことも述べられてゐるから、ここでそれらについての白石の所論を現代の諸説との関連において分析して見ようと思ふ。すでに引用した「蝦夷志」序の文の通り、白石は地域別に蝦夷の種族名を挙げてゐるが、「渡島蝦夷」とは東北海中に在る者であるのに対して、「書紀」の「陸奥蝦夷」に該当するものは「東蝦夷」と呼んで區別してゐるものの、これを同種族と見なしてゐるのは異なつて「肅慎」の方は、全く別国・別人種としてゐる。即ち、先づ『読史餘論』において

「其後、天子二十三代、年は四百五十三年を隔て、三十八代（マ）齋明の御代に、蝦夷しばしば叛しき。阿部臣・阿部引田臣比羅夫などとして討しめられしに、蝦夷つひに従ひ、肅慎と云國迄、討したがふ。（中略）初神武東征し給ひしより此かた…天子自らは（皇化に従ひ参らせぬ者）を征し或は皇子をして是を討しめらる。其中、神功・齋明の如き女王にておはしませしかど、皆親らはを征せられき。

（但し三韓・蝦夷・肅慎等の如きは海外の事にありしかば、多くは將軍して討れし也。神功・齋明の御代の事も海外の事にあづかりしかど、是は親征したまひし所なれば此に申侍るなり。」（新

井白石全集第三。原片仮名交り、句読点は筆者）

と述べてゐて、肅慎を別の一国として扱ひ、「海外の事」といふ表現をも用ひてゐる。また佐久間洞巖宛書簡において石鑑にふれ、

「石鑑ニツきてくめづらしく忝奉レ存候。此物の事は、本朝の國史にも二所か三所か見へ候。（中略）此物、俗間に申す神軍の矢の

根にて候き。きはめてふるまものに候。すなわち書經に候筈、孔子家語・國語などに候石磐にて、肅慎國のものに候。すでに國史にも、肅慎國のもの佐渡に入犯し候事も候。蝦夷地より入犯の事も候。次に壺碑に韃靼國への道程も見へ候。韃靼は古肅慎の地にて候。天平の頃迄も本邦よりの往來の通路、たしかに有たると見へ候。太古の時に彼國のものども入犯し候はいふに及ばず、東奥・常陸又は越後等の地に盤據し候て、度々の軍も候を俗に神軍とは申傳たるに候。其軍有レ之候時にちか得候て、かの軍仗を掘り埋め又は塚などにし候か。急雷雨の時にたゞき出され候を、國史には降り候と心得候てしるし置れしと見へ候。仮初にも西南地方になきものに候を以ても、弥以て肅慎の檣矢石磐孔子の御覽及ばれ候ものと存じ候へば弥生の物に候。（後略）（白石全集第五）

と述べたもの（「石磐」のことは『白石先生神書』にも、木下順庵と白石の間答が収録されてゐる）、そのほか鷹の羽の別称としての「肅慎の羽」につき近衛家熙に説明した時のことが『本朝軍器考』に次のごとく記されてゐる。

「過ニシ比在洛之間、攝政大相國肅慎ノ羽ノ事ヲ尋ネ仰セラル、東北ノ夷地ニ出ヅル、箭ノ羽トコソ心得侍レ、我國ノ俗、凡物ノ産スル地名ヲ以テ、其物ヲ称スルコト、譬ヘバ果ヲ上林ト云ヒ、酒ヲ下若ト云フ類、即チ此ナリ、昔時肅慎國ヲ征セラレシ事、肅慎人ノ米リシ事等、日本書紀ニ見エシ所モ多ク、渡島津輕ノ津ノ司等シテ、（註）韃靼國ニ遣サレシ事モ、続日本紀ニ見エ侍リシガ、（註）韃靼ハ古ノ肅慎之地ナリトハ、異朝ノ書ニ見エタリ、陸奥國多賀城壺ノ碑ニハ、（註）

鞬國ヲ相去ル里數ヲシルシ侍レバ、其代ニハ彼ノ地方ニ出デシ箭ノ

羽、ツネニ我國ニ采タリヌレバ、其箭ノ羽ヲ肅慎トハ称セシニヤ、

今モ蝦夷地方ヨリ出ヅル物ハ、其品スグレテ侍リト答ヘ申シキ、後

ニ保安元曆ノ記ニ、執柄供奉行幸ノ時、府生、番長、平篠左鷲羽、

右肅慎羽、コレヲ新調ス、烏鷲ノ羽ヲ以テ、三府ニ切リ続キタリト

云フ所ヲ抄出シテ賜ヒタリ、烏鷲ノ羽ヲ以テ、三府ニ切リ続キタラン

ハ、鷹ノ羽ノ妻黒ニ倣ヒシモノナリ、（白石全集第六）

上記著書・書簡の示す通り、白石は『書經』『孔子家語』『国語』等

によつて肅慎國の存在及び肅慎人の製作にかかる石砮（石鏃）や肅慎

羽のことを知り、且つ恐らくは『隋書』『通典』によつて（上文には

「異朝ノ書」）、鞬鞞が古の肅慎の地であることを知つたもののやうである。

※『書經』には「成王既伐二東夷一、肅慎采賁」（序）とあり、『左

伝』には、肅慎を「北夷」とし「在ニ玄菟北三千餘里一」（昭王九

年）と記してをり、石砮のことは『国語』に「武王時、肅慎氏貢ニ

栝矢石砮一、長尺有咫（一尺八寸）」（魯語下）と見えてゐる。上

文に「栝矢」とある「栝」は、白石の謂はゆる「肅慎羽」の矢の幹

に当たるものと思はれ、白石は「栝矢」を引いてはゐないが「肅慎

羽」は「栝矢」の羽に当たるものと解してよいやうに思ふ。また

「鞬鞞」については、『隋書』は「鞬鞞在二高麗之北一、邑落俱有

二酋長一、不二相統一、凡有二十七種……即古之肅慎氏也」（東

夷伝）とあり、『通典』にはこれを「勿吉」の文字で表はし「後魏

通焉、在二高句麗北一、亦古肅慎國地」と記してゐる（諸橋『大漢

和辞典』に拠る）。

しかし鞬鞞の存在は、いはゆる「董の碑」によつても知り得たこと

が上引「新佐手簡」「軍器考」の文によつて明かである。白石が『隋

書』や『通典』を読んでゐたとすれば、肅慎が高麗もしくは高句麗

の北に位置してゐることを知つてゐた筈で（前註※参看）、さうとす

れば肅慎をシナ大陸の沿海州の一国として認識してゐたことは疑ひな

い。『蝦夷志』として樺太についての説明があり（白石は「北蝦夷」

に註して「即ち奥蝦夷、夷中之を呼んでカラトと曰ふ」と述べてゐる）、

北蝦夷が東は大海に際し、西北はすなはち韃靼東南の海で「両地の相

去る、近遠詳かにするを得べからず」といひ、マテオリリッチの坤輿

万国全図の説明文を引照して、全図に謂はゆる東方室韋の地が野作に

当るものと推定してゐることによつても――同書の後文および『宋覽異

言』の記述によつて知られるやうに、オランダ人からの聴取、ブラウ

図の閲覧もまた北海道を中心としたアジア北方圏の認識を詳しくした

ことは言ふまでもない、白石のアジア北方地域についての認識は、

当時としては拔群であり、そのイメージはかなり判然としてゐたと言

へよう。但し、当時は勿論まだ間宮海峡の存在の知られてゐない時期

だから、上記の文につづく説明文では樺太は島としては認識されてゐ

ない。

かういふ白石のアジア圏認識を前提として考察する時には、白石が

渡島を北海道とし、政庁の置かれた後方羊蹄の地点を北海道南部地域

に擬したことの斉合性が首肯されるかと思う。この白石の思考には、

エゾ地についての認識の進んだ近世人であるといふ好条件が加はつて

はるるが、しかし滝川博士が指摘されたやうに、海流（『永禄日記』に謂はゆる大潮「尾閭」^{びろ}）による交通圏の意外な拡がり、古代日本人の積極性——海外進出の積極的態度はどの時代にもほぼ共通して認められる——、さらに大化改新後の政治情勢などを勘案すれば、津田博士や田名網氏のやうにエミシ活動の舞台および蝦夷征討の地域を本土に限定して考へることは、まして津田博士のやうに肅慎国をも津輕奥地に擬することなどは、妥当を欠くものと考へざるを得ない（二）（津田博士が斉明紀六年の記事に見える「阿部臣以陸奥蝦夷、令棄己船」の陸奥蝦夷を渡島蝦夷の誤ではなからうか、とされたのも無理な解釈であらう）。

ただ田名網氏の説で傾聴すべきは、白石がエミシ・エビスとエゾとを蝦夷といふ文字の上から同一視した（『蝦夷志』）とされた点である。田名網氏によればエミシとエビスとは同一で、エミシが転訛してエミス、そしてエビスとなったのであるが、エゾはこれとは別存在で、この呼び名はもと東北の北辺あたりからアイヌの呼び名として、エミシとは別に起ったものと考え、と言はれ、平安末から鎌倉にかけての和歌に見える「千島のえぞ」、「今昔物語」の夷（「エゾ」と訓ず）などは北海道以北のアイヌをさしていることは疑ない、とされる。そしてエミシ・エビスは異人種ではなく軍に勇猛なる者の意味で長く東国の武人に対して用いられることになったのに対して、エゾは奥羽北端・北海道の異族アイヌをさす言葉として、これとは別に起り明治にまで及んでいる、と言はれる。この両者の相違を示すのが、斉明紀に見える阿倍臣の征夷の記事中における蝦夷と肅慎とであると、この

区別は後者が蝦夷とは明らかにちがったものであったためであり、それが津輕の北辺か北海道かのアイヌを指している場合と同じであると思う、と言はれ、傍証として「今昔物語」陸奥国安倍頼時行二胡国一空返語の一節を引照された。田名網氏のいはれる通り、白石はアイヌを蝦夷の文字で記述したのでから（『蝦夷志』）田名網氏のいはゆる「エミシ」「エビス」と「エゾ」とを同一視したことになるが、しかし白石が田名網氏と見解を異にするのは、上述の肅慎觀に徴して明かであらう。白石の肅慎觀はシナの史書によって形成されたと思はれるので、『本朝軍器考』において「東北ノ夷地」といふ表現を用ひてゐるのも、恐らくは『書經』の東夷・西夷、「春秋左氏伝」の北夷などの系列に属するのであらう。周知の通り東夷・西戎・南蛮・北狄の語の見えるのは、『礼記』や『管子』などであり、『北狄』の語は『書經』『史記』にも見えるが、靺鞨を以て北狄としたのは『集韻』である（『靺鞨、靺鞨、北狄別種』——諸橋「大漢和辞典」）。この狄に関連して一言付け加へると、津輕藩ではアイヌを狄に近い「狄」の文字で表記してゐる（四）。白石が肅慎を北狄として扱はなかつたのは、上記の理由によるものと思ふ※。

※『統紀』には「征狄所」（和銅二年七月一日、出羽柵のことか）、
「鎮狄將軍」（養老四年九月二十九日・神龜元年五月二十四日・宝龜十一年三月二十九日）等が見え、また『類聚国史』『日本後紀』には「夷狄」（延暦十九年五月二十二日・同二十五年大同元年四月七日）の語が見えてゐることであり、儒者であると共に歴史学者でもある白石がこれらの史書を読んでゐない筈はないし、「北狄」

「夷狄」の語などには習熟してゐたことは勿論であるが、それにも拘らず『蝦夷志』その他に、上記諸語が現はれてゐないのは前述のやうな理由によるものであらう。

二 坂上田村麻呂の征夷とその遺跡・伝承 についての白石の觀察論評

東北地方全般にわたって田村麻呂遺跡伝承の多いことは周知の通りであるが、これを津軽地域に限って見ても多数のそれが数へ上げられるのである。『新撰陸奥国誌』によれば、田村麻呂創建を縁起とする神社の数は青森県全体で三十を越え、そしてその大半が津軽地域に存在するのである。田村麻呂の征夷については、『日本後紀』が肝要な部分を闕失してゐるため推測にまところがあるが、現在のところ田村麻呂の足跡は津軽地域にまでは及ばなかつたといふのが、ほぼ定説のやうである。しかし、現在も盛行をつづけてゐる七夕行事としての倭武多―ネプタ（もしくはネプタ）は、その起源が田村麻呂の征討時にあるとされ、蝦夷誘引のために発案されたものとの伝承がある。上述の田村麻呂の創建と伝えられたもので比較的古い例としては岩楯郷の曾我光高が、熊野堂の燈油料田の埋没を救ふため、陸奥国司北畠顯家に拝領地のうち三町歩の寄進を申請して、許可された文書が遺存してゐることがある（建武二年正月二十七日付、『斎藤・遠野南部文書』）。また白石なども注目した「壺の碑」、或ひは「都母（壺坪）の石文」――いはゆる「日本中央」碑についての伝説も津軽には幾つかある（五）。但しこの碑は実は「多賀城碑」のことであるともされ

てをり、白石の場合は正に同説の好例である。即ち、前掲の通り書簡や「軍器考」において或ひは「壺碑に靺鞨国への道程も見え候」といひ、或ひは「陸奥国多賀城壺碑ニハ、靺鞨国ヲ相去ル里数ヲシルシ侍レバ」云々と述べてゐる。しかし、その里数とは「去靺鞨国界三千里」であると言ふまでもない。それはともかく、白石その人は津軽における田村麻呂の活動を信じてゐたやうに思はれる。田村麻呂遺跡について白石がその話を聞いた一人は、甲府藩儒者として同僚だった服部清助で、『白石先生紳書』には「服部清助語りき」と前置して、「津軽には田村丸の御跡所々に有といふ。城下より五六里の所なるが、大明神といふ有。田村丸の旧跡也など云也」（白石全集第五）と述べてゐる。もう一人、名は記さないが津軽人から聞いたことを記してゐるのは『蝦夷志』である。

前掲三種の蝦夷の説明文につづいて、「厥の後、凡そ蝦夷と称する者、皆其の内地に在る者を謂ふ也耳」といひ、上述の多賀城碑、即ち壺の碑の建立のことを述べた後に、

「則ち知る、宮城郡北方数百里、盡く夷地に没す（註略）。其の之を荒傲に驅つて、悉く東山の地を収め、海に因つて塞を為すに至れるは、則ち征東將軍坂上大宿禰田村麻呂の功、蓋し以て大なりと爲す。史闕けて其の事を伝へず、歎くに勝ふべけんや。」

割註
左記

掌て之を津軽人に聞く、坂將軍行宮之地、住々にして有り、土人亦た其事を説くこと猶ほ前日の如し、唯だ其の文献の以て徴するに足る者無しと云ふ。」

と述べてゐるのがそれである。この文章において注意を払ふべきこと

が幾つかあるが、その一は「史闕けて其の事を伝へず」であり、その二は当時の（近世）の津輕では田村麻呂の征討事業が「猶ほ前日のごとく活々と語られてゐたといふ事実である。前者と同趣旨の文は『新佐手簡』にも見え、「毗沙門天王化身」伝説と併せて次のごとく述べてゐる。

「坂上田村麻呂毗沙門天王化身のよしの事、少しも少しも名將のために妨にもならぬ事に候。其故は漢家にては名將を誉め候とは、

たとへば呂望又は孫呉張子房韓信など、とりぐに比し候て申し候。

これは堯舜以来、文武の道を論じ来り候餘俗故の事にて候。こなたにて文字傳來このかた、仏学專に行はれ候て、王仁など已後、儒生にて大臣にもなられ候吉備だに仏道信向の事にて、世の鴻儒と申すほどの人々仏氏の徒ならぬはなく、三善相公清行のみ不同心に見へ候迄に候。しかるに上宮太子、守屋との戦に護世四天王の像を頭に戴かれ候など申す事よりして、こなたにて名將を誉め候とは、毗沙門天王と申すより外の事は世の人ふつとしらぬ事に候。そのたとふ所を以てたつとび候上は、すぐに當時のたとふ所はおしはかれ候。然ば名將たる事うたがふべからず候。あなたにては呂望・孫呉と申し、こなたにては四天王と申すにて候。如レ此の世のならはし、是非もなきとは申すべく候。更々田村麻呂の誉を妨げ候べく候事にはなく候。日本後紀に見へ候やうの事にて田村の功はつくされまじき事に候、誠に千百の一二をしるされ候事か。」

因みに上文に見える毗沙門天多聞天は、古代―この平安時代においては、王城鎮護の四天王の随一で北方の守護神として尊信されたから、

田村麻呂がその化身とされたとすれば、それはいかにも田村麻呂にふさはしい適用といふことになる。現在の岩手県・青森県、とくに前者には平安時代の作品と思はれる観音像・毘沙門像が多数残つてゐるが（鎌倉期のものもある）^(七)、観音は慈悲の徳をもつものとして崇められたのであるから、この北奥地域に慈悲と鎮護を象徴する二種の仏像が多く見出されることは、当時の朝廷の蝦夷対策の理念を示すものと解してもよいであらう。

すでに明かにされてゐるやうに、陸奥出羽按察使・征夷大將軍を歴任かつ兼任した田村麻呂の献策に基いてとられた対夷政策即ち懷柔策としては、農耕養蚕の技術指導・食料専用田の設置・蝦夷の諸国への分散移住などと共に、神々の祭祀・仏教の弘布による蝦夷教化が挙げられてゐるが、最後の教化事業は田村麻呂の征夷を考へる上に見逃せない一面で、―田村麻呂伝説は征討と神社建立に大別されるといふ―その武威とならんで田村麻呂の征討事業を成功に導いた要因と思はれる。「胆沢の賊」の最後の統領であり勇猛を以て聞えた阿豆流為が、田村麻呂に死闘血戦をいどまずに降伏したこと、その阿豆流為のため最後にまで庇護につとめた田村麻呂の態度などなどを見れば（註八、参照）、田村麻呂に対する蝦夷社会の人々の平和的な対応が想察されるのであり、それが上述の神仏をかりた教化策―田村麻呂その人が仏教篤信者だった―と並んで、輝かしい成果を挙げ得たものと考へられる。津輕地域に田村麻呂の創建を伝える神社の多いことも不思議ではなく、その事跡が前記のやうに江戸時代中期においても、「猶ほ前日のごとく」に語られてゐたのも怪しむに足りないことである。しかし

て当の白石その人も、私見では田村麻呂の足跡が津軽地域にまで及んだと考へてゐたのではないかと思ふ。第一節で述べた通り、斉明朝においてすでに、阿倍比羅夫の軍隊が津軽から更には北海道松前の地にまで歩武を進めてゐたと考へた白石のことであるから、まして「名将」で「四天王」と崇められた田村麻呂に対して、右のやうな考へ方をしたとしても何等不条理ではなく、むしろごく自然な思考と見なしてよいのではあるまいか。「日本後紀」の記述が詳細を關くとし、「誠に千百の一二をしるされ候事か」と述べた感懐こそは、かういふ推量を可能ならしめるものと思ふ。

※田村麻呂伝説とは直接關係はないが、同じ類型と考へてよいと思はれるものに義経の末路についての白石の論がある。それは「読史餘論」をはじめ、「蝦夷志」「新安手簡」などに見えるもので、「読史餘論」では「吾妻鏡」の記す義経の死を疑つて、「義経、手を束ねて死に就べき人にあらず。不審の事なり。今も蝦夷の地に義経の家跡あり、（中略）義経後には奥（註―満洲）へ行しなど云伝へしとも云ふ也」といひ、上文の「奥へ行し」は「蝦夷志」では「或は伝ふ、廷尉此を去つて北海を踰ゆ」と云ふ。」（この後の部分で、寛永年間に韃靼の地に漂着した越前新保の人が燕京（後の北京）で義経の画像と覺しきものを見たといふ異聞を附記）と記し、手簡でも「蝦夷志」所載の異聞と同趣のことを述べた後、「韃靼部（註―「蝦夷志」では「奴兒干部」）へ後には避られ候か。蝦夷よりは建夷（註―建州の夷）の辺、遠からぬ境と承及候」と言つてゐる（分）。津軽地域でも義経の逃避行にまつはる伝説が多く、その代表が三厩

であり、ここから北海道へ渡つたことになつてゐる。白石当時の常識からすれば、エゾ地への通路は下北半島ではなくて津軽半島であり、この三厩港經由が順路とされたことは、前掲「蝦夷志」の序において白石が、「御覽津」―松前といふコースについて「四時、此の路常に通ず」と註記したことを見ても知られやう。白石からすれば、義経ほどの名将が泰衡ごときに、たやすく謀殺されるなどとは考へられなかつたであらうから、義経の蝦夷地入りを信じ、渡満についても可能性を認めたのも尤ものことと思はれる。ともかく、田村麻呂にしても、義経にしても、前者はその足跡が津軽の地に及び、後者はそれを踰えて北海道にまで達したと考えることは、白石の歴史地理的感覚からすれば、何等無理でも飛躍でもなかつたと言へよう。なほ、白石の田村麻呂観において「伝説の虜」になつたとの批判をうけてゐる、「陸奥ノ夷高丸」討伐記事にもふれておきたい。問題の記事とは「読史餘論」の一節で（延暦九年の征東副使としての征夷成功につづく文）、

「十六年に征夷大將軍になされたり。廿年にまた陸奥ノ夷高丸ト云しが駿河国清見関迄攻のぼりしに、田村丸是を打やぶり北るを追て陸奥神楽岡と云ふ所に至てきりてければ、陸奥悉く平ぐ。」

といふものである。このいはゆる伝説は、仏教史として著名な「元亨釈書」に見えるものであるが（「延鎮伝」）、年代など無視されてゐる点でも伝説といふよりは創作だといった方がよいとまで評されてゐる。事件の真偽は暫くおいて、文中の「神楽岡」の所在については諸説があり決めがたいが（二〇）、当の白石がどう考へたかは上文では明瞭で

ない。ただ傍点を附した部分「陸奥悉く平ぐ」を表現通り受け取るなら、この「高丸」征討の結果、陸奥全域が平定されたといふのだから、田村麻呂の武威が津輕の地まで及んだと白石が判断してゐたと推考することが出来るわけである。この推考は、前述の私見を補強することになるかと思ふ。

結 語

本稿の最初の意図は、古代から近世にわたる津輕史についての白石の所説——これは近世においては白石にして始めて可能なことである——を取り上げて検討するつもりだったが、第一節のツガルイエミシの問題で予想外に紙数を費したので、中世における安東氏の史的役割についての論、近世では津輕家の創業についての觀察の二つを省略する結果となった。これらについて論は後日に譲ることとして、不充分ではあるが白石の津輕古代史觀の輪廓はほぼ明かになったかと思ふ。

上述の二節の分析を通じて知られるやうに、白石の論說の特徴は、和漢古今の歴史についての深く豊かな学殖が基底をなしてゐることは勿論、異邦人との接触によって空前の世界地理的認識を持つに至つてゐたこと、而もその即物的・実用的な学問の性格が独自のエミシ論・坂上田村麻呂觀を生み出し得たものと思ふのである。とくに齊明紀の蝦夷・肅慎征討の記事の解釋において、現代史家の賛詞を得るほどの創見を打ちたてたのは、江戸幕政に参与し対内外政策の立案に当たつた白石なればこそ出来たことであらうし、さういふ体験が大化改新後の中央政府の北方経略といふ壮大なプロジェクトを察知把握し得た結

果と言へるのではなからうか。

なほ「蝦夷志」についても、その片鱗にふれたにとどまるが、本書がアイヌ研究における先駆的な研究書であることは言ふまでもないことであり、而もその叙述範圍が北海道本島のみにとどまらず千島全域・樺太にまで及んでゐる点は、それが政治地理学的性格をも兼備するものとして改めて注目さるべきところかと思ふ。

本小稿は匆忙の間に草したもので参考文献の渉獵も足らず、また精考にも欠けることであるから、忌憚なき御叱正にあづかりたい。

註

(一)「白石先生紳書」卷三に見える「石砦」についての順庵・白石の問答とは、次のごときものである。

「先生又能州の辺に石砦を間々得る也と仰有。某答ふ、殊に奥羽の地方に雨るよし申す。続日本紀やらんにも一年に再度雨りたる由を記し申に、是慥なる物に記する始りと存ず。たゞし私の考には雷斧雷楔の類か。奥羽は雷の震する事多き地方にて侍る。古記に見えしも夏の比かと覚申す。もし然らずば肅慎地方の石砦を龍のまき来るが羊角風の吹送るなるか、と申せば、先生雷爪也とて黒く漆にてぬりたる様に光沢ありて、頭の方は尖り尾の方砕たる様なる物、是も能州地方にあり。其堅き事、金鉄の如し。但しこれは海鼈の爪なる由を承る、と仰せ有。」(白石全集第五)

(二)津田博士は、「肅慎」を以て「支那の知識を崇拜してゐた当時の官人」によつてつけられた雅名(支那めかしい名称)で、そのさすところは即ち渡島、もしくはそれと同意義での津輕に外ならぬの

であらう、とされ、また「肅慎は本来、極遠の部族を称する雅名であって、実際の称呼ではないから、筆者により場合によって、其の適用の範囲を異にすることも起り得る」とも言はれた「肅慎考」）。なるほど蝦夷とは違ひ且つより遠隔地に居住する種族の名として、中国シナの文献に見える東夷もしくは北夷「肅慎」を借用したとの推論は首肯できるが、この語の適用範囲を筆者や場合により異なり得るものとされた点には疑問が感ぜられる。北方への領土拡張に意欲的だったと推測される当時の中央政府が謂はゆる「肅慎国」について、曖昧な認識しか持ち得てゐなかつたかのごとき判断はいかかなものであらうか。

因みに、津田博士説を承けた田名網氏が、三善清行の「意見十二箇条」冒頭の語、「東平二肅慎一北降二高麗一、西虜二新羅一、南臣二呉会一」中の肅慎を以て「明かに奥羽の蝦夷をさす雅名」であるとされたのも、他の三者がいづれも外国であることを考へれば、またその文意からしても妥当とは思はれない。筆者はむしろ滝川博士説に賛成したいが、少くとも白石の場合は、石碯についての説明や独自の解釈―考古学の先駆者と見なされる理由はここにある―を見てもわかる通り、シナの古典の受売りの知識の域を脱してをり、地理的認識をふまへた極めて実地的なものだったことは本文で述べた通りである。

(三) 田名網氏のこの肅慎を以てアイヌと見なし、蝦夷と区別される見解に対しては、津田説に従つて高橋富雄氏も、両者はともに人種的内容も定かでないのだから区別することは困難だとし、前註で述べた津田博士の見解、「雅名」説に賛同されてゐる（『蝦夷』）。

しかしその後文で、種族として確言などできるはずはない、としながら、「蝦夷」はよりアイヌに近いという程度にはいつても誤りでないだらう、と言はれたのは不徹底の憾みがある。筆者は俄かにはアイヌ説に左袒できないが、それはともかく、本文前掲―白石が鮮卑の檀石槐による倭人千余家（「北倭」）略奪について述べ、その「鮮卑」を「東胡の種」とした所論（『蝦夷志』）は、その鮮卑をはっきり肅慎に擬してゐるわけではないけれども、示唆的である点で注目すべきものと考へてゐる。

なほ鮮卑について附言すると、内田吟風氏によれば、鮮卑はかつては蒙古族とトウングース族との混種であらうとされたが、今日ではトルコ族だったとする説が有力であるといふ。上記「東胡」が匈奴に滅されると（BC二〇六）鮮卑は匈奴の治下に入り、一世紀初め頃から後漢に侵入したが、匈奴の衰退にともなひ後漢と友好関係を結ぶことになる。はじめは多数の親族が分立してゐたが、前出の「檀石槐」が推されて大人となるや鮮卑諸族を併合し、全蒙古を治下に入れ（一六六年間ほど）、しきりに後漢に侵入した。檀石槐の死後は再び統一が失なはれたが、この頃から世襲君主制が成立し、鮮卑系部族連合体が内蒙古の各地に勢力をはって、やがて五胡十六国時代の主要な役割を果たすことになる。そして、その後に現はれる北朝（北魏・北斉・北周）は鮮卑諸氏族によって建てられたのだといふ（『アジア歴史事典5』平凡社）。斉明御宇は唐朝初期に当たるから、問題の「肅慎」に該当すると思はれる鮮卑部族の居住地と活動状況とは、別途に考察されなくてはならなくなるが、これは今の筆

者の力を超へたことであるから、専門家の御教示を仰ぐほかない。

(四) 狄は狄とも書き、両犬のかみ合ふ、または吠え合ふ状をいふとのことであるが(上田・岡田共編『大字典』・諸橋『漢和大字典』)、津輕藩でこの文字をアイヌに宛てたのは、やはり日本人とは異った人種であるとの意識に基いてゐることを示すもので、筆者は「北狄」の狄と何らか関係がありはしないかと臆測する。津輕藩ではアイヌをこの狄で表記してゐることが記録で知られるが、例へば、宝永四年二月十五日に狄三人が四代藩主信政に面謁したことが伝へられ(『津輕藩庁日記』)、また宝暦六年九月に、いはゆる宝暦改革の中心人物乳井貢によって、宇鉄辺(津輕半島)の狄が戸数人別帳に編入されたといふ(『津輕藩庁日記』)。

(五) 「壺の碑」のことは、白石の場合、本文掲記の『本朝軍器考』中の文のほか、『新佐手簡』でも再三ふれてゐる。その一つにおいて白石は、『軍器考』に見える「撰政大相国」、即ち近衛家熙から同碑の写し(親写)を貰ったことを述べ、それが善本であること(「世に伝ひ候よりは手次よく候まゝ」云々)、その碑の筆者とされる「児雲真人」とは能書家・名文家として聞へた淡海真人三船のことであらう、と述べてゐる(全集第五、四五四―五頁)。他方、青森県内に伝承されてゐる「都母(壺・坪)の石文」については、拙著『青森県の歴史』中の「北門の雄と壺の碑」「田村麻呂將軍」の項、荒井清明氏の『新書青森県史』中「日本中央碑」の項を参照されたい。

(六) 服部清助(『白石日記』には「清介」ともある)、名乗は保考、

号は鷲溪。白石と同様はじめ甲府藩邸に儒者として出仕、網豊の西の丸入りにより、のち西丸儒者となる。その名は『白石日記』に頻出、『折たく柴の記』にも見えてゐる。因みに、その子藤九郎も儒者として甲府家に仕へ、西丸儒者ともなつてゐる。父と同じく白石と交りがあつたやうである。

(七) 高橋富雄氏『みちのくの世界』一八 一木の群像・拙著『青森県の歴史』―「観音と毗沙門天」の項、参照。

(八) 田村麻呂の献策に基く対夷政策については、高橋崇氏の「坂上田村麻呂」に全般的な詳説があり、その中の懷柔策については井上光貞氏や新野直吉氏の論がある。井上氏は「陸奥の族長、道鳴宿禰について」(前掲『蝦夷』所収)において、「日本後紀」延暦二十一年正月甲子条の逸文「陸奥国三神加レ階、縁三征夷將軍奏二靈驗一也」(日本紀略)を挙げ、「これは坂上田村麻呂の胆沢征討の時のことであるが、神々を祭つたのは在地の住民を懷柔するためであつたらう」とされてゐる(第四節註七)。新野氏の論は、『古代東北史の人々』の第六章坂上田村麻呂と大墓阿豆流為に見え、田村麻呂の高次元の政治的判断と阿豆流為の田村麻呂信頼とが情をこめて説述されてゐる。

(九) 白石の「義経蝦夷地經由渡満」説については、拙論「新井白石と伴信友」(日本歴史二六〇号、昭和45)において比較的詳しく説明を加へたから、御参照願ひたい。

(一〇) 高橋崇氏「坂上田村麻呂」一〇三―四頁、参照。

(国学院大学教授)